

スティグリッツ報告書（2009）

このような流れを先進諸国の枠組みで強固なものとしたのが、「スティグリッツ報告書（2009）」である。この報告書は、2008年にフランス大統領のニコラス・サルコジの要請により立ち上げられた「経済パフォーマンスと社会プログレスの測定に関する委員会」の報告書として公表されたものである。本コミッションのメンバーには、ジョセフ・スティグリッツ教授、アマルティア・セン教授、ジェームス・ヘックマン教授などのノーベル経済学賞受賞者が名を連ね、錚々たる顔ぶれの構成であり、その影響度はフランスにとどまらず世界的であったといってもよい。報告書の執筆は、スティグリッツ教授、セン教授とジャンポール・フィトゥッシ教授（フランス経済研究所会長）を中心として執筆された（Stiglitz, Joseph E., Sen, Amartya & Fitoussi, Jean-Paul 2009 Report by the Commission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress. 和訳 福島清彦訳(2012)『暮らしの質を測る—経済成長率を超える幸福度指標の提案』金融財政事情研究会）。この報告書は、一般的に「スティグリッツ報告書（Stiglitz Report）」と呼ばれており、金銭的指標のみで人々の生活水準を測る時代から、非金銭的指標と金銭的指標を補完的に参照する時代へ突入したことを「お墨付き」とすることとなった。

コミッションの目的は、（一人あたり）GDPを唯一の経済パフォーマンスと社会プログレスの指標とすることの制約を受けて、どのような補完する情報が必要であり、どのような指標が適切であるかを議論し、それに基づく提案を行うことである。報告書に含まれるキー・メッセージは二つである。一つ目のメッセージは、現在のウェル・ビーイング（current well-being）の評価と、持続可能性（sustainability）の評価は異なるものであるということである（p.11）。その上で、コミッションは、「伝統的なGDPの問題」「生活の質」「持続可能性」の三つのサブグループに別れて、議論を行っている。二つ目のメッセージは、経済的生産を測ることから、人々のウェル・ビーイングを測ることへの重点移動である。報告書は、ウェル・ビーイングは多次元的な概念であり、

- i. 物質的生活水準（所得、消費、資産）
- ii. 健康
- iii. 教育
- iv. 個人の社会活動（就労を含む）
- v. 政治的発言力と統治
- vi. 社会的つながりと関係性
- vii. 環境（現在および将来）
- viii. 経済的、物理的な安定

の次元の要素に規定されんとする。現行の所得を軸とした計測は、これらの多くの次元を反映しておらず、改善が必要である。

報告書は、キー・メッセージをより形のあるものとするために、12の提案を行っている。
スティグリッツ報告書の12の提案（報告書 概要から抜粋 -邦訳 著者 カッコ内著者）

提案1： 物質的なウェル・ビーイングを測定する際には、生産ではなく、所得と消費に着目すべきである

提案2： 世帯（家計）への視点を強調すべきである

提案3： 所得、消費は、資産（の情報）と共に考えるべきである

提案4： 所得・消費・資産の検討に際しては、（平均ではなく）その分配にもっと重点を置くべきである

提案5： 所得の計測に、市場外の活動も含めるべきである

提案6： 生活の質は人々の置かれた客観的状況と、個人のもつ潜在能力（**capability**）によって決定される。人々の健康、教育、個人的活動、環境の状況を測定する手法を改善すべきである。特に、社会的つながり（**social connections**）、政治的発言力、不安定度は、生活満足度を予測することができ、それらを測定できる信頼度が高い方法の開発が急がれるべきである。

提案7： 生活の質の指標は、そのすべての分野において格差を包括的に評価できるものであるべきである

提案8： 生活の質を測るための社会調査は、生活の質を規定する諸次元のリンク（関係性）がわかるように設計されるべきであり、その情報が各政策分野において生かされるべきである

提案9： 各国の統計局は、さまざまな生活の質のマクロ指標（**aggregated indexes**）の構築が可能なように、生活の質の各次元の情報を公表すべきである

提案10： 客観的な指標に加えて、主観的な指標は、人々の生活の質を測る上で重要である。各国の統計局は、人々の生活の満足度や、人生経験、および人々の選好を調査項目に加えるべきである

提案11： 持続可能性の評価には、「**Stock**」の概念を表す複数の指標のセットが必要である。この指標セットの中には、持続可能性の金銭的指標が入るべきであるが、現時点においては、経済的持続可能性にフォーカスするべきである

提案12： 環境の持続可能性については、よく検討された物理的指標を基に、今後もフォローしていくべきである。特に、気候変動や、漁業資源の枯渇といった問題にかかわるように危険レベルにどれほど近づいているのかを表す明確な指標が必要である。